

平成 29 年度スポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」
全国フォーラム 報告書

| | |
|-------|--|
| 日時 | 2018（平成 30）年 2 月 10 日（土）14：00－16：30 |
| 会場 | 日本体育大学 東京・世田谷キャンパス記念講堂 |
| 参加者 | 248 名（一般 32 名、事業関係者 30 名、日本体育大学 102 名、日本体育大学系列校 84 名） |
| プログラム | <p>14：00 開会挨拶 日本体育大学 副学長 笠井里津子</p> <p>14：05 講演Ⅰ「超攻撃型 水球日本代表ーポセイドンジャパンの挑戦」 日本体育大学 教授 大本洋嗣 (水球男子監督)</p> <p>14：35 講演Ⅱ「失敗の先に～新体操を通して学んだこと～」 日本体育大学 助教 村田由香里 (体操／新体操)</p> <p>15：05 休憩</p> <p>15：15 講演Ⅲ「パラリンピックから学んだ I'mPOSSIBLE (アイムポッブル) の精神」 日本財団パラリンピックサポートセンター マセソン美季 (アイススレッジスピードレース)</p> <p>16：05 地域拠点の取組紹介 日本体育大学 特別研究員 佐藤洋</p> <p>16：20 閉会挨拶 日本体育大学 教授 関根正美</p> |
| 内容 | <p>開会にあたり、日本体育大学副学長の笠井氏より挨拶があり、フォーラム前日に開幕した平昌オリンピックにふれながら、「選手たちのストーリーに期待している」と話した。</p> <p><講演Ⅰ> はじめに水球競技について紹介し、男子の球技競技におけるオリンピック出場の厳しさに触れるとともに、競技スポーツの存在意義について、必ず挫折することが成長過程において貴重な経験になると話した。その後、自身の水球日本代表監督としてのキャリアと日本水球界の悲願であるオリンピック出場に至るまでの経緯を、映像を用いて紹介した。また、「見返りを求めずに没頭する、失敗を重ねて下手な自分を受け入れる」などの「トップを目指すための思考」や、グッドルーザーを追求していき、負けに向き合うことで負けを恐れなくなったという話も紹介した。最後に、水球競技の今後について、水中の格闘技からの脱却を図るためにルールを守ることなどの大切さを説明し、「フェアプレイなきスポーツに発展はない」と話した。</p> <p><講演Ⅱ> はじめに、新体操競技について実際の演技映像を用いながら紹介した。新体操を通して、「努力することを習慣にすること」「失敗することは恥ずかしいことではない」ということを学んだと話し、「好調なときに厳しく、不調期な時に傍にいてくれる人」の大切さを述べた。また、誰にでもある挫折については、「挫折ではなく、飛躍のための分岐点に変える」という考え方で乗り越えられたと話した。最後に、「弱い自分、他者を認める勇気」を新体操から学び、「失敗は不安になる要素ではなく自信をつけるための鍵」であるとし、「熱中して何か打ち込んでいることから何かを感じて、学んで、自分に生かせるか」ということが大切だと話した。</p> |

<講演Ⅲ>

はじめに自身の半生を紹介し、「体育教師になるのが夢だった」と話した。その後、車椅子生活になったことに対する体験・経験を話し、パラリンピックの競技者をみたことが転機となり、その選手たちを象徴する「失ったものを数えるな。残されたものを最大限にいかせ」という言葉を紹介した。「差別や偏見は教育が生み出す。しかし、教育で差別や偏見を軽減できるはず」と述べ、2014年パラリンピックソチ大会閉会式の映像を紹介し、「Impossible (不可能)」の文字にアポストロフィを加えて「I' m possible (私には、なんでもできる)」になるという考え方を説明し、「不可能だと思えたことも、見方や考え方を変えたり工夫したりすれば、なんでもできるようになる」と話した。このような視点に基づくパラリンピック教育は、共生社会の構築を目指していることを説明した。最後は、IPC (国際パラリンピック委員会) ニック・フラワー氏の言葉と IPC シンボルマークのスリーアギトスの意味を紹介し、「障害者がパラリンピックでのみ輝くのではなく、社会の中でも輝けるように」と話した。

<地域拠点の取り組み紹介>

全国中核拠点として連携してきた7地域拠点の取り組みについて報告した。

【千葉県】

教員及び指導主事向けそれぞれの「教員向け研修の実践」を重視し、成果として、自主的な授業展開案の作成につながることや、県の教員研修企画への反映が期待できるという点が挙げられた。

【長崎県】

事業終了後もオリンピック・パラリンピック教育を継続して実施できる人材の確保をねらい、推進協力員6名に対して、本学教員を講師とした事前研修と推進校である中学校・高等学校への各5回の派遣を実施した。次年度も継続して推進校への派遣を予定している。

【千葉市】

体育・保健体育でのパラスポーツ実施に向けた指導方法の検討がなされ、教員向け実技研修及びモデル校での実践を行なった。体育の授業で実施していく見通しが立ち、今後はモデル校での実践を踏まえた指導資料を作成し、全市立学校への配布を予定している。

【高知県】

ゲストティーチャーの授業をイベントとして終わらせないために、学校の実情や授業の内容についてゲストティーチャーと一緒に考えるプロセスを十分に設け、事前事後学習を含めた継続的な学習となるように授業を実施した。

【大阪市】

ホストタウン相手国であるオーストラリア出身の外国語指導員を迎えた事前学習や、国際親善女子車いすバスケットボール大阪大会に出場するオーストラリアチームとの交流会など、ホストタウン構想と関連した取り組みを実施した。

【兵庫県】

シッティングバレーボールの授業の実践があった。全員がボールに触りラリーを続ける工夫を生徒が主体的に考える時間を設けることにより、クラス全員で取り組むことを促すことができ、生徒同士のコミュニケーション意識の向上が見られた。

【石川県】

「全員が自己ベスト」をテーマとした持久走の学習及びマラソン大会の他、特別支援学校との交流、オリンピック・パラリンピック競技新聞の作成、マスコット投票等、体育や総合的な学習の時間はもちろん、道徳や音楽など様々な教科で実施した。

閉会にあたり、関根氏より挨拶があり、本日の内容から「自分の生き方」を探して、感じて、東京2020大会への参加や関わり方のヒントを少しでも持ってもらえれば幸いと話し、全国フォーラムを終了した。

今年度の集大成として、本事業関係者のみならず地域住民など一般参加者を含めて開催されたことに意義があり、今後オリンピック・パラリンピック・ムーブメントを推進するにあたって有意義な時間となった。



会場の様子



1964年東京大会のポスター展示



開会挨拶：笠井氏



講演Ⅰ：大本氏



講演Ⅱ：村田氏



講演Ⅲ：マセソン氏



地域拠点の取り組み紹介：佐藤氏



閉会挨拶：関根氏